

## 「収容」を甘いビジネスに仕立てた厚生省の精神保健政策

大熊一夫さん

(ゆき注：ジャーナリスト・元大阪大学大学院教授)

滝山病院で起きていることは、1960年代初頭に「収容」を甘いビジネスに仕立てた日本の精神保健政策（厚生省が演出した国策！）の当然の帰結です。

1960年代だったら、終末处理的暴力精神病院は日本中にたくさんありました。それは、日本精神神経学雑誌 1970年1月号の学会声明を読めばわかります。あれから半世紀以上たって、無法暴力病院はさすがに減りましたが、でも根絶は難しいでしょう。

なぜなら、こんな政策を打ち出した当の厚生省（厚生労働省の前身）が、いまだに、自らの失敗を反省していません。自分が生み出した収容ビジネス界が強大になりすぎて、収容ビジネスを批判することもできなくなってしまった、というのが正確な表現かもしれません。

収容ビジネスと良心的医療の両立は、成立しません。良心的に振る舞えば振る舞うほど損をしてしまうのですから。番組の終わりのほうで、スーパーカーで逃げ去る現院長が出てきました。収容ビジネス亡者にふさわしい姿でした。

かの暴力精神病院の横綱である宇都宮病院は、1984年に2件の入院者怪死事件がバレたものの、今も健在です。2~3年前に大わいせつ虐待事件が発覚した神戸の神出病院も、いまだに存続が許されています。

そして、この滝山病院だって、先代院長の時代から「病院の体を成していない病院」として有名でした。息子の現院長は、今から4半世紀ほど前、埼玉県の朝倉病院の院長だった時代に中心静脈栄養をバンバンやって保険医取り消し処分を受けた札つき医者です。その彼が、保険医の資格をやすやすと手にいれ、ふたたび、滝山病院院長として復活を遂げ、その病院が暴力病院であることがこの度のテレビで証明されました。

今回の番組から想像できることですが、おそらく、滝山病院内に長年横行している暴力に心を痛めた良心的看護師が、苦勞の末に暴力の現場を映像に残した、つまり動かぬ証拠を残してくれた。だからやっと、番組として成立したのでしょう。

精神病院のかなりは、昔も今も伏魔殿です。内部で何が起きているのか、こうしたゲリラ手法でも使わないと、国民は知ることができません。

伏魔殿を一掃する道は？

牢屋型治療装置である精神病院などさっさとお払い箱にして、地域精神保健サービスにすることです。それ以外に道はありません。